

Title	質問1 : ガタつく「研究者」
Author(s)	鈴木, 萌花
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 49-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90068
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集2 第7回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけてられる声を聴く）
テーマ「研究者になるということ：研究者と当事者のあいだで」

質問1：ガタつく「研究者」

鈴木 萌花

「私は研究者である」と「私は当事者である」をふたつに分断させるのではなく、ふたつのアイデンティティのあいだを柔軟になびきながら自分自身を保ち続ける小松原さんの姿に、私は強さを感じとりました。研究者と当事者のあいだに生じる葛藤、動きを単に受け止めるだけでなく、能動的に感じとり、積極的に語る小松原さんの言葉に、私は幾度も「かっこいい」と声を漏らしていました。このように研究者として強く生きる小松原さんの姿に感銘を受けていたなか、自らの研究に眼を向けた途端「ガタガタと揺らぐ自分」に苦しんでいることに私は気づかされました。生身の人間を研究の対象としている私は、自分と対象者の存在のあいだを柔軟に捉えることができなくなり、臨床哲学の院生としての自分を保ち続けることに難しさを感じていたのです。今回は、私自身の研究において生じている行き詰まりを交えながら、哲学研究者としての態度や研究者の位置について伺ってみたいです。

『当事者は嘘をつく』で描かれた小松原さんの研究（性暴力研究・水俣研究）は、当事者の主体的な「なまの」語りを出発点に新たな知の世界へとひらかれていると感じています。私自身、自らの研究においても文献研究のみならず、研究対象の「ひと」の生々しい言葉に対しても敏感であり続けたいと考えています。そのように考えていたなか、私は自身の研究に異変を感じるようになりました。「ひと」の生々しい語りを聴こうとしている私自身が、自らの研究においてどのような立ち位置にいるのか、わからなくなっていたのです。どうしてこのような異変が生じているのか、それを考えるヒントが『当事者は嘘をつく』（第5章／第8章）に隠されているように思いました。第5章と第8章ではそれぞれ、性暴力研究、水俣研究について述べられていました。両者において共通していると私が感じたのは、研究が単に人々（当事者）の声を収集したものとして完結するのではなく、聴いた先に、小松原さんがひとの声にカタチを与えているところです。小松原さんの研究での、「当事者の言葉」を「研究者の言葉」にしたり、様々な声から「水俣の哲学」を形作ったりする姿勢は、研究者としての態度であると感じました。「研究」という名に相応しいものになるためには、幾多の「なまの」声を列挙するだけでは不十分であり、それらの声を理解し、理論化（一般化、普遍化、構造化？）することが求められるのでしょう。目の前の声を聴き取る経験ばかりに囚われてしまえば、それが理論化の妨げになってしまう恐れもあり、「なまの」声との距離の取り方を研究者は自覚しながら研究をすすめるべきではないと感じました。このような気づきを得ていたなか、自身の研究で自らの位置がわからなくなったと感じた異変は、研究と現実のあいだで生じていると考えるようになりました。私が研究している「ひと」は、

認知症高齢者です。認知症について書きたいと欲したのは、それが医学的な見方だけでは捉えきれない病気であるところに惹かれ、認知症の生きられた世界があると直観したからです。私は哲学者のものの見方を用いながら、認知症である祖母の声を理解することを通して「認知症の生きられた世界」を浮かび上がらせようとしています。しかし、断片的にも抽出される理論化された認知症は、あまりにも収まりよくきれいに形作られたものに思えてなりません。形作られた認知症は時に、生身の、現実のものから遠ざかっているようにさえ思えます。理論化されたものに対して違和感を覚えてしまうのは、「なまの」語りから理論や哲学をすくいとる過程で、そぎ落とされているリアルな生々しさがあるからだと考えています。だからといって、対象者の生々しさを隅々まで拾いあげて語ろうとすれば、「研究」として成り立つことができなくなってしまいます。研究の対象者の語りから浮き上がる理論「と」その過程でそぎ落とされた生々しさのあいだで私はガタガタと崩れてしまい、最近では研究対象の存在に無意識のうちに呑み込まれては感情を取り乱してしまうことがあります。対象者の声を「研究」として成立させることを意識すればするほど、研究対象の存在から遠のいてしまい、対象の存在の「リアル」に接近すればするほど研究から遠ざかっているように思われ、研究において私はどこに身を置く必要があるのか分からなくなるのです。ただ、私はこの分からなさにガタついているからこそ得られている視点もあると感じ、あえてガタついている自分をそのままにしても良いのかもしれない、と私はふと思うのです。しかし、ガタつくことで「研究」が危うくなるという危険性もはらんでいるため、やはり分からなくなってしまうのです。

以上のことを踏まえたうえで小松原さんに伺いたいのは、(1)生身の人間を研究の対象とする研究者は、研究過程で導きだされた理論「と」そこからそぎ落とされたリアルな生々しさのあいだをどのように捉える必要があるのでしょうか。(2)「なまの」声から抽出された理論からこぼれ落ちた生々しさに対して、研究者がとることができる態度はあるのでしょうか。そして、(3)研究において、導き出された理論「と」そぎ落とされた生々しさのあいだのどこに研究者の位置があるのでしょうか。以上3点、伺いたいです。よろしくお願ひ致します。

(すずき・もえか)